

陸上運動系領域部会 実証授業協議会記録

○授業者自評

子供たちはこの4時間跳ぶことを楽しんで学習に取り組んでいた。第1時から幅跳びを楽しんでおり、より楽しくするために「ターゲットジャンプや岩跳びの助走の距離を伸ばしたい。」と振り返りを書いていた。第3時では自分の記録が伸び悩んでくる児童が増え、上手に跳んでいる友達の動きに目が向いている児童がいた。児童の考えとして、着地が大切なのは得点にならないから（ターゲットジャンプでは着地で動いてはいけない。岩跳びでは岩にはあたってはいけないというルール）→自然に片足踏み切り、両足着地を身に付けさせることができたのではないかと。これを受けて、第4時では高さや助走に目を向けている児童がいた。

○協議会を進める前の補足：協議会の視点①

知識及び技能「動きのポイントを知る」を第4時に設定したことについて話を深めてほしい。ポイントを見付ける過程を大事にしていきたいと考え、実感を伴った知識及び技能にするために第4時にしたが、適切だったか話し合ってもらいたい。

○グループ協議及び全体協議

協議① 児童が三つの資質・能力のバランスをよく育むことができる課題解決的な学習過程になっていたか。本日の授業では、陸上部会が示した育てたい児童の姿を引き出すことができていたか。

- ・ 本日の児童の様子を見ると、「たくさん跳びたい。遠くに跳びたい。」という気持ちが大きく、得点を気にせずたくさん跳んでいるようだった。それなのになぜ、得点にしたのか。
→将来的には競争にもっていきたいと考えている。それが競争の仕方の工夫にもつながると考える。
→チームの得点という意見もあったが、3年生の実態から周りに目がいくことが少し難しく、「自分が跳びたい」という思いが先行していた。ジャンプウォーミングアップの平場でジャンプする際、同時に跳び、競争する児童も見られたため、今後4年生の学習では競争が見られるようになるのではないかと考えている。
→得点ということに関しては児童もそこまでの意識はなかったが、C:「〇こ跳んだ」T:「〇こで同じだね」
C:「大きさが違う」T:「大小で難易度が違うから、得点を変えよう」というやりとりから得点の必要性を引き出した。
- ・ 場が多いのはよいことだが、何もできなかった子は記録が出ない。数値（cmで記録をとる）であれば、必ず記録が出るのではないかと。だから、数値をとった方がよかったのではないかと。
→たくさん跳ぶ経験をする中で技能を身に付けさせたい。ざっくりとした具体物で記録を取っていき、4年生では記録に目を向けさせていきたい。
- ・ 4年生での指導事項が盛りだくさんになってしまうのではないかと。
→児童の実態（技能分析の結果）から考えて、3年生では「片足踏み切り」「両足着地」のみとした。4年生での指導についてはこれから検討していきたい。
- ・ 課題解決的な学習をさせるために、「幅跳びのポイントを見つけてね。」より「それぞれの場でのポイントを見つけてね。」の方が具体的なポイントを出せたのではないかと。
→児童の小さな学びのステップを大切に、実感を伴った理解ができるように、みんなができるような運動のポイントにした。自分なりのコツや運動のポイントに気付く過程を大切にしたいと考えている。
- ・ 協働的・対話的な学習どこまで求めていたか。
→3年生では得点の取り方（岩を跳び越えている。ターゲットジャンプでピタッと止まっていること）を伝え合うことができればよい。また、励まし合ったり、安全に取り組めていたり、できたかできていないかを伝えられたらよいと考えている。ポイントを伝え合い、競争することについては4年生で学習する予定である。
- ・ 3年生の幅跳びと、跳の運動遊びとの違いはどこか。

→低学年の跳の運動遊び：運動の楽しさに触れさせる。上方、前方、連続、手をつなぎながら、の跳躍。

3年生の幅跳び：運動の楽しさや喜びを感じさせる。跳び越せたか確認したり競い合ったりする跳の運動に取り組む。

協議② 主体的、協働的な学習活動とするための手だて（運動の場）は児童にとって有効であったか。

- ・ 運動の場に平場の設定がないが、平場についてどのように考えているか。

→ジャンプウォーミングアップで平場を設定している。運動遊びから幅跳びへの接続を意識して、ゲーム性の高い場を運動の場とした。今回の運動の場で跳んでいるうちに技能ポイントが身に付き、4年生では平場でもポイントを意識しながら跳べるようにしたい。

- ・ 運動の場の得点で0点だった児童がいた。

→頭打ちになっている児童がいる。できている子でも何回跳んでもたった一回でも17点、何回とんでも17点なので、記録が伸びていない子が多い。0点だった子に関しては、跳ぶことはできているがルールが守れず0点になっていたり、高得点に挑戦したために0点になっていたりした児童もいたかもしれない。

○指導・講評 志賀克哉 統括指導主事

- ・ 片足踏み切り、両足着地は、簡単なようできていない実態がある。
- ・ 「運動を楽しむ中で学ぶ3年生」、「結果を楽しみながら学ぶ4年生」というとらえ方は分かりやすい。
- ・ 児童に何を対話させるか。今日の授業では励ましはあったが、運動のポイントに関しては見られなかった。
- ・ 何を思考・判断させるのかを明確にすることが大切。今日の授業では、子供たちから着地に関しての意見が多数出てきていた。
- ・ 運動のポイントを理解しても、自分で体験できない児童もおり、実感を伴った理解にならなかったかもしれない。振り返り①で運動のポイントを共有した際には、多くの子供が「やっぱり。」と感じていたと思うが、一部には「そうなのかな？」と感じている子もいたはずである。一部の子はポイントを理解していても、動けていない子もいる。
- ・ 体育における子供の欲求は何か。競争型や達成型があるが、今日の授業は達成型だったのではないか。子供たちは、本当に競争を求めているのだろうか。
- ・ 体育授業と「BOWLER ROLLER（ボウリングの球をレールの上に転がして、ちょうどよいところで止めるゲーム）」はつながる部分がある。
 1. 行い方を知る必要がある。
 2. 繰り返さなければ、感覚はつかめない。

→BOWLER ROLLERは弱いと球が坂を上ることができない。強いと戻ってきてしまう。何度かやればコツをつかんでいくものである。繰り返し行う中で自分の感覚を研ぎ澄ませていく。
 3. 成果・成功体験がないとやりたいと思わない

→できるようになった。がんばればできる。という体験が必要である。
- ・ 今日の授業では、「先生！早くやりたい！」や「パイナツプル」を一緒に声をかけていて学習を楽しんでいた様子が見られた。
- ・ 今日の学習を見ていると、跳ぶこと自体を楽しむ姿が見られたので、運動の場を平場としても子供たちは満足できていたのではないか。
- ・ 岩跳びの場の弊害について
 - ①着地で手を前にするべきところを、おしりに岩に当たらないようにするためにのけぞる形になっている児童がいた。
 - ②岩に当たらないために、開脚して着地をしていた児童がいた。
 - ③踏み切りで岩に当たらないために、フォームが崩れてしまっている児童がいた。